

# 自然の エネルギーが もたらす景色 動く素材を考える



三分一博志氏の講演の様子。スクリーンの映像は「Running Green Project」(2001年)。

一般社団法人日本建設業連合会(以下、日建連)は、十月十日に「日建連建築セミナー」を東京証券会館ホールで開催した。講師には広島を拠点に活動する建築家の三分一博志氏をお招きし、「地球のディテール」というテーマでご講演いただいた。

## 動く素材とは何か

三分一氏は講演の冒頭で、敷地の地形や気候を詳細に読み解く行為は、建築を考える上で重要なプロセスであると述べた。そうした地球上の自然の営みの中で、空気や水といった物質は、建築にかたちの根拠を与える要素のひとつでもあるという。三分一氏は、こうした要素を「動く素材」と呼び、その動く素材を、動かない素材(屋根、壁、床など)で可視化することで、建物はその地域固有の存在になれると述べた。

三分一氏が動く素材に興味をもったのは、窯元・三輪家の登り窯を見学し、その成り立ちについて説明を受けた経験が大きいという。空気の挙動に則ってつくられた窯の構造は、空気の移動(「速度」)を適切にコントロールするものであり、その考え方は建築に応用できると感じたとという。

その後は、氷室や樹氷など、水をテーマにした建築を設計している。気体・流体・固体のように、気候に応じてかたちを変化させる水は、動く素材として特に興味深いと述べた。



セミナーの後半では日建連建築設計委員会委員長を務める河野晴彦氏(右)が加わり対談が行われた。スクリーンの映像は「(仮称)直島町民会館」風洞実験の模型(左)と犬島精錬所美術館(右)。会場には学生の姿も多く見受けられた。

## 地球の絶え間ない循環の景色

昨年、BCS賞を受賞した「犬島精錬所美術館」(受賞時・犬島アートプロジェクト「精錬所」)は、動く素材の循環によって構成された建築であるという。そこでは人も動く素材のひとつとして考えられており、排泄物さえも敷地に植えられた植物の栄養素となり、建物の緑化を促進させる。人が集まれば集まるほど建物は豊かとなり、島の活性化につながると述べた。

日建連の建築設計委員会委員長の河野晴彦氏が加わった対談では、現在進行中のプロジェクトが紹介された。そして「地球の一部となり、地球に認められる建築をつくりたい」と三分一氏は述べ、セミナーを締めくくった。